

2 0 2 1 年 度

香川大学経済学部編入学試験

## 問 題 用 紙

小論文

7ページ

### 【注意事項】

1. 監督者の「始め」という指示があるまで、問題用紙を開かないこと。
2. 「始め」の合図と同時に、すべての解答用紙に受験番号を書くこと。
3. 落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合は、黙って手を上げて、監督者の指示を受けること。
4. 問題の内容についての質問には応じないが、その他の用事があるときは、黙って手を上げて、監督者の指示を受けること。
5. 解答は、解答用紙に横書きで記入すること。
6. 解答を訂正する場合は、きれいに消してから記入すること。
7. 解答用紙及び下書用紙は、片面のみを使用すること。
8. 解答を書き終えた者は、黙って手を上げて、監督者の指示を受け、退室することが出来る。

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

日本列島では歴史上、どのような災害がどれほど起こっているのだろうか。これを正確につかむことは極めて困難だ。『日本災異志』という書物がある。明治26年(1893)に小鹿島果が編纂したもので、正史や日記など文献資料を参照して作られたものだ。残された記録の性格によって事実の把握に精粗があるだろうし、その後の史料の発見や考古学の成果などによれば、さらに多くの事例を付け加えることができるだろう。ただし、ここでは全体の傾向がわかれば十分なので、これによってみよう。

次ページの[表1]は、『日本災異志』に見える災害を種類別に集計したものだ。年代は100年ごとに分けした。一般に時代が新しくなるに<sup>したが</sup>順って記録資料は増加するから、それともなつて件数も増えると思われがちだが、必ずしもそうではない。数字には、それぞれの事情が存在するようだ。

飢饉や疫癘<sup>ききん えきれい</sup>は、記録が増えるわりに江戸時代の数はそれほど多くない。むしろ、8、9世紀の古代の多さが目立つ。律令国家が飢饉や疫癘に関心を持っていたことの結果ではあろうが、実際にも多かったに違いない。江戸時代に減少するのは、凶作や疾病への対策が相対的に改善されたことを予想させる。

火山の噴火や津波は、江戸時代に多くなる。記録の増加や人びとの見聞する範囲が広がったことによるのだろう。たとえば、蝦夷地<sup>えぞち</sup>や離島の噴火は、古くは中央の人びとの耳目に触れることはなかったが、列島本土の人びとが渡り住み、情報が流通するようになって、次第に記録されることも増えたのだろう。

地震は、古代・中世の多さが特異だ。地方の情報が少なく京都などの事例が中心なのに、この多さである。都城に籠居<sup>ろうきよ</sup>する貴族たちは、ささやかな天変地異にも吉凶を占った。小さな凶事でも、それ

---

<sup>1</sup> 疫病のこと。

<sup>2</sup> 北海道のこと。

を払う呪法じゆほうを行った。この多さは、貴族たちの恐怖感の反映なのだろう。このことから、災害における心理的・精神的側面の重要性を考慮する必要があることがわかる。他方、江戸時代には、噴火と同じように地方で起きた地震の情報も増えるが、件数の増加はそれほどでもない。実際に被害があった場合を記録するような、現実的な対応になったのだと考えられる。

大風や洪水は、江戸時代にむしろ多い。生産活動の広がりや生産条件への関心の深まりが、記録の増加につながったのではないか。大河川の下流域での耕地開発が進んだことにより、水害を受けやすくなったということもあるだろう。

火災も江戸時代の多さが目立つ。京都は古代以来の都市であったが、江戸時代には江戸と大坂という巨大都市が出現する。各地にも城下町や宿場町・湊町みなとまちなど多くの都市が誕生した。都市は家屋が密集しており、いったん火事になると被害も大きい。基本的には、全国的に都市化が急速に進んだ結果だと考えて間違いないだろう。

[表1] 『日本災異志』にみる災害

| 年代                        | 飢饉  | 大風  | 旱魃  | 霖雨  | 洪水  | 疫癘  | 火災    | 噴火  | 地震    | 津波 |
|---------------------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|-------|----|
| ～ 600 (推古8)               | 1   |     |     |     | 1   | 2   | 1     |     | 2     |    |
| 601 (推古9) ～ 700 (文武4)     | 5   | 9   | 7   | 7   | 8   | 5   | 14    | 1   | 24    | 2  |
| 701 (大宝元) ～ 800 (延暦19)    | 50  | 43  | 22  | 13  | 17  | 36  | 11    | 4   | 90    | 2  |
| 801 (延暦20) ～ 900 (昌泰3)    | 48  | 61  | 28  | 28  | 33  | 32  | 74    | 8   | 487   | 5  |
| 901 (延喜元) ～ 1000 (長保2)    | 9   | 43  | 16  | 14  | 28  | 28  | 61    | 2   | 103   | 1  |
| 1001 (長保3) ～ 1100 (康和2)   | 4   | 27  | 14  | 9   | 13  | 20  | 108   | 2   | 65    | 2  |
| 1101 (康和3) ～ 1200 (正治2)   | 15  | 34  | 7   | 11  | 21  | 12  | 88    | 5   | 58    |    |
| 1201 (建仁元) ～ 1300 (正安2)   | 5   | 63  | 8   | 1   | 14  | 10  | 133   | 7   | 100   | 2  |
| 1301 (正安3) ～ 1400 (応永7)   | 10  | 22  | 11  | 6   | 14  | 10  | 67    | 6   | 79    | 2  |
| 1401 (応永8) ～ 1500 (明応9)   | 26  | 44  | 8   | 9   | 55  | 31  | 89    | 11  | 90    | 3  |
| 1501 (文亀元) ～ 1600 (慶長5)   | 15  | 24  | 12  | 7   | 27  | 17  | 40    | 23  | 123   | 3  |
| 1601 (慶長6) ～ 1700 (元禄13)  | 16  | 65  | 14  | 9   | 65  | 9   | 170   | 25  | 69    | 10 |
| 1701 (元禄14) ～ 1800 (寛政12) | 14  | 102 | 10  | 12  | 85  | 32  | 205   | 38  | 39    | 16 |
| 1801 (享和元) ～ 1869 (明治2)   | 7   | 40  | 8   | 8   | 45  | 9   | 402   | 12  | 34    | 5  |
| 計                         | 225 | 577 | 165 | 134 | 426 | 253 | 1,463 | 144 | 1,363 | 53 |

出所：小鹿島果編[1893]『日本災異志』(覆刻，五月書房，1982年)より筆者作成。

こうしてみると、耕地の拡大や都市化といった①人びとの活動の広がりと災害とが深い関係にあることがうかがえるし、被害や復興といった現実的な問題から災害をとらえる傾向が進んでいることもわかるだろう。

戦争も人びとに多大の災厄をもたらすものだ。15世紀から16世紀にかけての戦国時代は、列島各地で戦闘が絶えなかった。それに対して江戸時代は、まれにみる平和な時代であった。寛永15年(1638)に島原天草一揆が終わり元治元年(1864)に長州戦争が始まるまで、220年以上にわたって国の内外での本格的な戦争も大規模な戦闘もなかった。これが「徳川の平和」と言われる。

これに対して同じ時期のヨーロッパは、戦争と平和の繰り返しであった。16世紀にはキリスト教徒が新教と旧教に分かれて争う宗教戦争が各地で続いている。17世紀の前半には30年戦争があった。18世紀になるとフランスのルイ14世が周辺国との戦争を繰り返し、オランダ・イギリス戦争、スペイン継承戦争と続く。さらに18世紀の末にはアメリカ独立戦争が起こり、フランス革命が干渉戦争からナポレオン戦争へと展開した。

戦争は社会に緊張をもたらす、平和は緊張を弛緩させる。平和は社会にある種の自由をもたらす。社会にはさまざまな矛盾がある。その矛盾が社会に緊張をもたらす、時に戦争を引き起こすのだが、戦争になると多くの矛盾は棚上げとなる。戦争が終わると棚上げされていた矛盾が顕在化し、しばらくするとそれが再び社会に緊張をもたらすようになる。緊張と弛緩が呼吸のように繰り返された。

戦争はそれまでに蓄積された社会の富や力を消耗させる。平和は消耗されたものの回復に始まり、やがて新しい蓄積につながる創造が続く。平和の時代に学術・文化・産業が発展した。戦争と平和は消耗と創造を演出し、社会システムや生活スタイルは螺旋状に変化していった。それがヨーロッパの発展につながった。

これに対して②徳川日本で外見的な平和が200年以上にわたって続いたのは、徳川日本が生み出した「平和のシステム」が存在したからだ。それは次のような内容を持っていた。

一つは、徳川將軍を頂点とする「公儀<sup>3</sup>」というシステムだ。將軍が領主層の共同利害を体現することで、領主間紛争が回避された。戦国時代の戦闘と豊臣秀吉の朝鮮出兵の悲惨な体験が、その背後にあったことは言うまでもない。

二つは、「鎖国」と呼ばれる外交システム。これによって対外的緊張の回避が図られた。もちろんこれは全く閉ざされたシステムではなかった。よく知られるように朝鮮、琉球、中国・オランダ、アイヌと「四つの口」を通じてつながるものであった。ヨーロッパ勢力のアジアからの一時的後退と清による大陸の強力な支配とが東アジアの相対的安定をもたらしていたことも、背景として重要であった。

三つは、領主による領民支配の基調が「撫民<sup>4</sup>」におかれるようになること。建前であれ「仁政<sup>5</sup>」理念が共有され、一揆・徒党は禁止されたが、訴願のルートは保証されていた。「村請制<sup>5</sup>」のもとで村役人を中心としたある程度の「自主的」な運営が保証されるなど、支配—被支配の激突を緩和するためのシステムがつけられた。

しかし、江戸時代は本当に平和だったのだろうか。一体平和とはなんだろうか。

たしかに戦争はなかったが、じつは江戸時代は、わたしたちが想像する以上に生き延びるのに苦労の多い時代であった。

江戸時代の平均寿命は正確にはわからないが、19世紀末の日本では、男42.8歳、女44.3歳とされている。江戸時代も40歳代前半と考えて間違いはないだろう。この時代に60歳で「還暦」を祝うことはまれだ。それよりも重視されたのは「四二歳賀<sup>5</sup>」で、村に残された「祝儀帳」は、「四二歳賀」のものが多し。これがだれもがする「歳祝い<sup>5</sup>」の最後だったのだろう。もちろん80歳、90歳まで生きる人もいたが、そういう人は特別で、領主から褒賞される対象だった。

とくに子どもは生きにくかった。生まれた子どもの半分は5歳までに亡くなった。多産多死であっ

---

<sup>3</sup> 幕府のこと。

<sup>4</sup> 支配者が民衆をいたわること。

<sup>5</sup> 村役人を通じて村ごとの年貢・諸役を上納させる江戸時代の農民支配の方法。

たため、どの家族でも平均すれば子ども数は2, 3人であった。また出産は危険をとまなうため、出産前後に亡くなる女性も少なくなかった。医療・衛生環境、食料・栄養事情などが十分でなかったのは言うまでもない。

そのうえにさまざまな災害が徳川日本を襲った。もちろん災害はいつの時代にも起きる。しかし、過疎地と過密都市との災害を比べてみればわかるように、同じ災害でも社会に与える影響は異なっている。

江戸時代の前期には、急激な人口増加と国土開発が起きている。それぞれの動向を追ってみると、人口は17世紀に2倍から2.5倍に急増するが、18世紀は4.5パーセントの減少、19世紀になって8.5パーセント増加する。耕地は、17世紀に1.5倍に増加し、18世紀は横ばい、ないし微増、19世紀は再び増加に転じている。ここから、人口も耕地も17世紀末にほぼ飽和状態になったと考えられる。そうした状況のもとで災害が頻発する。つまり、江戸時代は災害が社会に特別な意味を与える歴史段階であったのではないだろうか。

江戸時代の一般的な庶民の家族は、単婚小家族と言われる。平均的な家族数は、地方や時期によってやや異なるが、4人から7人程度であった。労働力の中心は一組の夫婦で、子どもや老人も相応の働きが求められた。こうした小家族では、夫婦の一方が倒れるとすぐ危機に陥る。耕地が少なく経済的な余裕のない家族ではなおさらであった。大雑把に言って、江戸時代中ごろの村で、二代、三代を超えて存続する家族は半数ほどであった。あとは潰れるか村から姿を消した。それでも戸数や人口が維持されたのは、余裕のある家族が分家を繰り返したからだ。同族関係が広がり、そうした家族が婚姻で結びつく。その親族ネットワークが家族を支えた。

厳しい生活環境と頻発する災害による消耗。そこから回復し生活を維持するために、人びとはそれにふさわしい生活態度を身につけ、それが世代を超えて受け継がれた。人びとはさまざまな営みを行い、さまざまな動きを起こした。そのなかで、「生きる」力が蓄えられ、「生きる」システムが工夫されたに違いない。文化の創造も「生きる」ことの表現ではなかっただろうか。

いずれにしても、徳川日本が、人の「いのち」が自然の脅威と偶然性に支配されていた社会であったことを押さえておきたい。

出典：倉地克直『江戸の災害史 徳川日本の経験に学ぶ』，中公新書，2016年（一部改変）。

設問1 「①人びとの活動の広がりと災害とが深い関係にあることがうかがえる」とありますが、どうしてそのように言うことができるのでしょうか。本文に即して300字以内で説明しなさい。

設問2 「②徳川日本で外見的な平和が200年以上にわたって続いた」とありますが、筆者はこの時代が平穏な時代であったと考えているのでしょうか。それともそうではないと考えているのでしょうか。まず、筆者の考えがいずれであるか明記した上で、その根拠を本文に即して400字以内で説明しなさい。

設問3 豪雨災害が頻発するなど、現在でもわが国は災害と無縁ではありません。このような災害の多いわが国において、われわれ自身はどのような取り組みを行うべきであると考えますか。地域社会との関わりを念頭にあなたの考えを500字以内で説明しなさい。なお、本文中には疫癘（疫病）についても記載がありますが、本問では疫癘（疫病）は除いて考えてください。